

宗密『円覚経道場修証儀』の礼懺法（覚書）

池田 魯 参

一

宗密（七八〇—八四一）は、二七歳で出家するが、この頃『円覚経』を知り、一読するや身心に歓喜をおぼえたという。三二歳の時、三年程前から書簡をやりとりして交際があった澄観（当時七四歳）に学び、二年間師事する。八一五年（元和一一）、三六歳の時、終南山の智炬寺に住し、『円覚経科文』（欠）『円覚経纂要』（欠）を著わした。後、終南山豊徳寺に住し、八二一年（長慶元）、四二歳の時、終南山草堂寺に退き、著作活動に専念する。鎌田茂雄『宗密教学の思想史的研究』（六八頁）には、

長慶二年から三年にかけて『円覚経大疏』十二卷、『円覚経大疏鈔』十三卷、『円覚経略疏』四卷、『円覚経略疏鈔』十二卷、『円覚経道場修証儀』五卷の著述が、精力的になされた。

と記す。その後、八二八年（太和二）、四九歳の時、慶成節に文宗に召されて入内し、大徳の号を賜わり、紫方袍を受け、

「政僧といわれる一面」を發揮し、三年ほど城内に住した。晩年は再び草堂寺に帰り、六二歳の生涯を閉じた。その頃、裴休の要請を受けて『中華伝心地禅門師資承襲図』を著わし、八三三年（太和七）、五四歳以後に『禅源諸詮集都序』を著わし、禅宗各派の宗義を明かし、教禅一致説を主張した。

宗密の六二歳の生涯を通覧してみても、『円覚経』の研究が重要な鍵を握っていることが知られ、なかで今日現存する『円覚経』の注釈書として著わされた、『大疏』『大疏鈔』『略疏』『略疏鈔』の四部作と合せて、『円覚経』にもとづく修行方法を説示する『道場修証儀』は、教禅の一致を主張した宗密の面目を伝えるものとして注目される。

二

それでは現存の『円覚経道場修証儀』十八巻はどのような修行方法として解明されているか。

この点に関して、早く昭和二九年に、関口真大『天台小止

観の研究』があり、宗密における天台止観受容の実態を、新出資料の『略明開蒙初学坐禅止観要門』と、『修習止観坐禅法要』『円覚経道修証儀』『円覚経大疏釈義鈔』『禅門要略』の四種の資料を逐次対照しながら、詳細な研究がされている。

さらに、約十年前の昭和五〇年に、鎌田茂雄『宗密教学の思想的的研究』が刊行され、この第七章で「宗密の仏教儀礼——『円覚経道場修証儀』について——と題する研究を取め、『修証儀』の全体にわたる究明がなされた。

今日までにこの二つの研究を超えるようなものではなく、『道場修証儀』に関しては究明し尽された感があるが、本論では別の視点から二、三試論を呈してみたい。

三

『円覚経道場修証儀』全十八巻の構成内容は、道場法事・礼懺法門・坐禅法の三本の柱で示される。『円覚経』の修行方法としてみる時、この三本の柱は、一貫した組織である。すなわち(一)道場法事七門は、(二)礼懺法門八門を実修するにあつたての、道場の設営方法や修行者の用意などを規定しており、それを(1)勸修、(2)簡器、(3)可欲、(4)棄蓋、(5)具縁、(6)厳処、(7)立志の七門として示している。

次の(二)礼懺法門八門は、前述の準備に基づいて、『円覚経』独自の礼懺法を実修するわけで、いうまでもなく『修証儀』

の根幹をなすものである。(1)啓請、(2)供養、(3)讚歎、(4)礼敬、(5)懺悔、(6)雑法事、(7)旋遶、(8)正思の八門である。

(三)坐禅法八門は、礼懺法門の(8)正坐思惟に関する具体的な別条規定と解すべきものであり、それを(1)総標、(2)調和、(3)近方便、(4)弁魔、(5)治病、(6)正修、(7)善発、(8)証相の八門に規定している。

三門の全十八巻における配分は、(一)道場法事七門が、第一巻目、(二)礼懺法門八門が、第二巻目と十六巻目にわたり、全体の六分の五に相当する分量をしめ、主要な部分を構成する。(三)坐禅法八門は、第十七・八巻の二巻で説かれている。

このように、構成内容の面からみても、論述の分量からみても、『道場修証儀』の中心課題は礼懺法門八門の中にこそあることが知られる。

顧みるに、関口博士の御研究では、(一)道場法事七門の中、(3)呵欲、(4)棄蓋、(5)具縁と、(三)坐禅法八門(1)と(8)の記述の全体が、『天台小止観』の全内容、すなわち(1)具縁、(2)呵欲、(3)棄蓋、(4)調和、(5)方便、(6)正修、(7)善発、(8)覚魔、(9)治病、(10)証果の教説内容を、一部記述の順序はとりかえても、ほとんど全面的に依用していることを究明したのであり、このことは対照表によっても一目瞭然である。勿論、『天台小止観』の宗密における受容の実態を指摘する課題の限りではこれで充分であろうが、『道場修証儀』の立場でみ

ると、問題にされたヶ所は、『道場修証儀』の中心をはずれた、前、後の部分であり、分量の上からいっても全体の六分の一にすぎないものである。

四

それでは『道場修証儀』の礼懺法はどのようなものであるか。(1)啓請、(2)供養、(3)讃嘆、(4)礼敬、(5)懺悔、(6)雑法事、(7)旋遶、(8)正思の八門についてみよう。

(1)啓請は、『円覚経』の会座の上首である文殊(21)・普賢(22)・普眼(23)・金剛藏(24)・弥勒(25)・清淨慧(26)・威徳自在(27)・弁音(28)・浄諸業障(29)・普覚(30)・円覚(31)・賢善首(32)の十二菩薩を中に、括弧内の数字の順で、その前には諸仏、諸菩薩を列ね、その後には大梵天、帝釈、四天王、土地靈祇・圭峰山神王など、一切の守護の神々を列ね、総じて四十三条の奉請文を記す。この請文を誦誦して道場に召請するわけである。

(2)供養は、啓請した諸仏菩薩などに向かって、胡跪し、香花をささげ如法に供養する。

(3)讃嘆は、一般的な梵讚偈（『勝鬘経』所出）を唱誦し、三宝に五体投地し讃嘆する。

(4)礼敬は、礼拝の対象となる仏を至心に憶念することである。勒那三藏『礼仏観門』の七種礼説を掲げ、礼敬の優劣を

示している。

(5)懺悔は、胡跪し、焼香、散華して、普賢菩薩に向かい、一切の悪業を懺悔する。『普賢観経』に基づく懺悔法である。

(6)雑法事は、勧請・随喜・回向・発願の順に行じ、発願の後に「無常偈」を誦誦し、念仏を行なう。

(7)旋遶は、道場を右遶し、三宝を念しながら徐歩し、次に誦経し、「南無阿弥陀仏」を何百遍と唱える。

(8)正思は、正坐思惟のことで、前の七門が事行であるのに対して、理行である。詳細は坐禅法八門にゆずっている。

ところで『円覚経大疏』巻下之三（統藏一―四―二―一九―五d）には、(1)供養（除慳貪障、感大財富）、(2)讃仏（除惡口障、得無礙辨）、(3)礼仏（除我慢障、得尊貴身）、(4)懺悔（除三四障、依正具足）、(5)勧請（除謗法障、多聞智慧）、(6)随喜（除嫉妬障、得大眷属）、(7)廻向（除狭劣障、成广大善）、(8)発願（除退屈障、総持諸行）から成る八種の礼懺法を記す。この説は『道場修証儀』の八門と対照してみると、(2)供養、(6)雑法事までの内容と一致する。すなわち、(2)供養、(3)讃嘆、(4)礼敬に、(5)懺悔と、(6)雑法事の中で記される、勧請・随喜・回向・発願を別立てにしたものに他ならない。

いうまでもないが、懺悔・勧請・随喜・回向・発願から成る五種の行法は、「五悔」と呼ばれ、天台智顛の『法華三昧懺儀』外で確立するもので、湛然是『摩訶止観輔行伝弘決』

で、この「五悔」の意義を確定した。

この点で、宗密が天台の礼懺法に多くを学んだことが推定される。例えば、道場法事七門の(7)立志に出る、「事中修」「理中修」の説なども、『法華三昧懺儀』(大正蔵四六卷九五〇頁上)に出る二種一心説に依拠するものであり、(5)懺悔に記される十心の説も、『摩訶止観』持戒清淨(大正蔵四六卷三九頁下)に出る順逆二十心の説による。これらの例からも、宗密における天台の礼懺法の位置を再考する必要がある。

五

ところで、天台の五悔の組織を依用するのであるが、発願の後に、典型的に「無常偈」を誦する点は『道場修証儀』の礼懺法の極めて特色のあるところである。

卷二では、発願が已って、「至心帰命礼本尊毗盧遮那仏」と唱えて礼仏した後、黄昏・初夜・中夜・後夜・晨朝・午時の六時それぞれに、「無常偈」を掲げている。

さらに卷三以下、卷一六にいたる礼懺法の各巻毎に、それぞれ異なる諸種の「無常偈」を掲げ、それぞれの礼懺法を結んでいる。出典を明記しているものだけを拾い上げても、『法句経』『涅槃経』『阿蘭若集禪経』『智度論』『阿含経』『正法念処経』『無常経』などから引用された偈文である。

なかで『無常経』の引用は諸処に分けてほとんど全文にわ

宗密『円覚経道場修証儀』の礼懺法(覚書)(池田)

たり、掲げられている。『無常経』は、義浄(六三五一七二三)が七〇一年(大足元)に洛陽で翻訳した經典である。法蔵(六四三—七二二)は、七〇三年(長安三)、義浄の訳場に列し、『金光明最勝王経』などの翻訳に参画し、現存しないが『無常経疏』一卷があったと伝える。華嚴宗と『無常経』の関連が注意される。

岡部和雄「無常経と臨終方訣」(『平川彰博士古稀記念論集』昭和六〇年・春秋社)で『無常経』流布の状況が整理され、南嶽法照(?)撰『浄土五会念仏誦経観行儀』(敦煌本)や、円照(七一—八〇〇)が著わした(不空)「表制集」卷二に、引用と記事が現われていることが指摘されている。

これと関連して、『無常経』ないし「無常偈」の誦誦が、華嚴宗の礼懺法の中に組み込まれたことは注目すべき出来事である。『道場修証儀』だけではなく、唐一行慧覺録『華嚴経海印道場懺儀』四十二巻の中でも、ほぼ全文にわたる引用がみられる。しかし、宋代に入って晋水沙門淨源(一〇一一—一〇八八)が、『円覚道場略本修証儀』一卷を著わし、(1)総叙縁起、(2)嚴浄道場、(3)啓請聖賢、(4)供養観門、(5)正坐思惟、(6)称讚如来、(7)礼敬三宝、(8)修行五悔、(9)旋遶念誦、(10)警策勧修からなる十門組織によって、宗密の『道場修証儀』十八巻の行法を再編した時には、「五悔」の後に続く「無常偈」は完全に削除されてしまう。(駒沢大学教授)